

江戸中後期における三都間の歌壇の対立

ユージェット・アロカイ (Judith Árokay)

ハンブルク大学アジア・アフリカ研究科日本学研究室

江戸時代には前期から後期にかけて、政治の中心の移行にともなって文化の中心も上方から江戸に移ったと言われている。文化的にも江戸が自信に満ちてきて、それが文学作品（小説、洒落本、狂歌など）の中にも現れるようになった。その証拠として江戸っ子意識の成立や文学作品における江戸言葉の定着もしばしば挙げられている。

上方から江戸へという文化の進行は単なる一本道ではなかったということもよく知られているが、江戸中期にあたる18世紀の文学を見ると、それが特に目立っている。

ここでは18世紀の文学から京都・大坂・江戸の歌壇の活動を事例として、和歌文学の展開を取り上げてみたいと思う。18世紀の和歌の歴史では大きな変化が起こっており、それは和歌革新として知られている。和歌革新とは具体的にいうと、さまざまな傾向を含んでいるが、最も大事な点としては次のようなことが挙げられる。1. 上方の堂上派と地下派との対立において起こった変化、2. 賀茂真淵の国学派の成立、3. それに従う江戸派の成立、4. 「ただごと歌」を推奨した小沢蘆庵と香川景樹の登場。和歌革新の結果を簡単にまとめるならば、和歌文学は中世的な伝統から離れ、詩的内容を当時の日常言葉で表すようにもなったということができる。

京都、大坂、江戸という三つの都市がこの変容の中でどのような立場で、

どのような役割を果たしたのかという問題は、その都市の伝統と深く関連している。三都の一般的なイメージを「フィクションとは意識されないフィクション」と理解して、現実の和歌文学の歴史に照らしてみる必要があると思う。Nelson Goodman が唱える反実(counterfactual)という概念を使用することによって、フィクションの領域が広がるという利点がある。反実の範囲は、作りごと、想像上のこと、偽り、虚構を意味するフィクション以外では、例えば未来に関わる投射的な側面 (projective) や規範的な側面 (normative) も含む。従って、文学作品で描かれる空事(虚事)以外では、法律や道徳、思想や評論などの分野で書かれたテキストと普遍性を要求する学問的なテキストも反実という意味でのフィクションとして扱われるようになる。

京都、大坂、江戸という三つの都市がこの変容の中でどのような立場で、どのような役割を果たしたのかという問題は、その都市の伝統と深く関連している。この問題を考察するためには、三都の一般的なイメージを「フィクションとは意識されないフィクション」と理解して、現実の和歌文学の歴史に照らしてみる必要があると思われる。ここでは Nelson Goodman が唱える反実 (counterfactual) という概念を使用することによって、フィクションの領域を拡大して考えてみたい。反実の範囲は、作りごと、想像上のこと、偽り、虚構を意味するフィクション以外では、例えば未来に係わる投射的な側面 (projective) や規範的な側面 (normative) も含む。従って、文学作品で描かれる空事(虚事)以外では、法律や道徳、思想や評論などの分野で書かれたテキストと普遍性を要求する学問的なテキストも反実という意味でのフィクションとして扱われるようになる。

江戸時代の歌壇の活動は色々な点で反実というコンセプトと関連づけることができる。しばしば三都の関係は江戸対上方、大坂対江戸という形で描

かれており、三都の対立は強調されがちである。江戸中後期の歌壇の対立や和歌革新において明らかになるのは、都市間の対立よりも、その中で活動した人間の競争から生まれた変わりやすい力関係である。

さて、江戸中期の歌壇は、上方も江戸も活動が積極的で、三都でもさまざまな歌壇が同時に活発に活動しており、互いに著しい影響も与えあった。その歌壇はそれぞれ特徴があったが、まずその中からいくつかを紹介したいと思う。

江戸時代の歌壇を中世まで溯ってみると、和歌伝統の保護者である宮廷が政治の舞台から引きこもった後も、平安や鎌倉時代から引き継いだ伝授を次代へと伝えていった。15世紀からは冷泉家よりも藤原為兼を祖先とする二条家の影響が強かったと言われている。二条派は割合保守的で、和歌史のなかでは古今和歌集を最も鑑賞したが、中世和歌の中から特に1359年に編集された頼阿著の「草庵集」を手本にしていた。後に、この「草庵集」は1653年に印刷されて、公家だけではなく、庶民の間にも広く手本として使われるようになった。

室町時代には二条流は二つの流派に分かれて、堂上派と地下派が成立した。堂上派とは細川幽斎から古今伝授を受けた貴族の系統をいうが、広い意味では中院、三條西、烏丸、冷泉、飛鳥井などの貴族の流派を含んでいるといえる。地下派というのは同じく幽斎から古今伝授を受けた松永貞徳を始祖とする流派を意味している。この地下派は17世紀の前半から庶民的な流派を形成し、堂上派と対立するようになった。代表的な歌人は後に幕府の宗匠になった北村季吟(1624-1705)そして京都の有賀長伯(1661-1737)や国学者でもあった加藤磐斎(1625-1674)であった。

I. 京都・大坂 1730 - 50 年

まず 1730 から 1750 年代までの京都と大坂の歌壇を紹介したいと思う。

堂上と地下との対立は 18 世紀の前半に京都の和歌活動のいちばん顕著な特徴であった。宮廷歌壇が活発で、靈元院を頂点として武者小路実陰、冷泉為久や三條西公福など貴族歌人による和歌御会がたえず催されていた。仙洞御所と禁裏御所に行われる歌の会であったので、その歌の会に参加するのは廷臣歌人に限られていた。その中でも、二条流の影響が著しかったといえる。この流派では、15 世紀より二条家が支配的だったが、將軍徳川吉宗が冷泉為久を引き立てたため、冷泉家は花井での権威を回復することができた。吉宗の冷泉家に対する好感によって、後には江戸で冷泉流歌人が数多く活動するようになった。当時の京都と江戸の対立は、二条家流と冷泉家流の対立でもあったのだ。

京都の地下派は松永貞徳の伝統を受け継いだ有賀長伯によって盛んになり、長伯は特に和歌の初心者向けの歌書によって京都と大坂を中心として和歌の普及に大きな功績をあげた。堂上と地下の交流はこの頃にはまだ比較的に限られていたといえよう。

. 江戸 1730 - 70 年

一方、江戸では 30 年代まで、貞徳まで溯る地下二条派は根強く定着していて、貞徳の弟子であった北村季吟と北村家が幕府の宗匠として仕えていた。その中で、將軍吉宗が、先に述べたように、冷泉家を引き立てて、冷泉為久と為村に師事した成島道筑信遍に歌論についての意見を書かせたり、歌集の編集などを命じたりしたのは、まるで革命のようであって、冷泉家の復権に

大きな影響を与えた。冷泉為村は江戸の弟子をあまり高く評価してはいなかったが、冷泉家の影響がこれ以降著しく増してきた。それにもかかわらず、北村家は 19 世紀まで引き続き幕府の宗匠を務め、政治的な権力にあまりにも近い立場にあったので、和歌革新には影響を与えられなかった。

元文頃、30 年代から 40 年代にかけて起こった国歌八論論争が冷泉家の進出よりも大きな変容を招いた。この論争によって国学即ち古学派が和歌の舞台にも定着した。その代表者は周知の如く賀茂真淵であった。国歌八論というのは、荷田在満が田安宗武の下命によって当時の和歌の役割や機能についての意見を述べて、将軍吉宗や宗武と激しく対立するようになったという有名な事件である。この多岐に渡る論争からいくつかの点を挙げてみると、堂上派による和歌の権威付けへの批判、和歌には倫理的な、道徳や教養につながる影響・価値がないということ、万葉集よりも新古今和歌集を高く評価すべきことなど、とても個性的な評論だった。宗武が怒って自分の反論を書き、又真淵にも意見を頼む事になった。宗武はそれ以前から水戸学派の影響で万葉集を高く評価していたが、真淵に出会ってから絶対万葉主義歌人にならざるを得なかった。その結果、在満が宗武のところで勤めていた地位を真淵に譲った。これにより真淵は生活を安定させることができ、以後二十年の間に国学を発展させ、自分の万葉歌論も完成させた。

真淵の県居門には最初から村田春道と加藤枝直が参加していたが、その子春海と千陰が真淵門流の最も重要な 12 人の歌人の内の二人であった。真淵の影響は江戸だけではなく、上方や他の地方にも及んだ。本居宣長と上田秋成の和歌師であった加藤宇万枝(1721-1777)以外にも数多くの弟子がいて、影響が歌論のみならず、国学、歴史、言語学などの色々な分野に及んだ。真淵が主張していた歌論の最も重要な課題は以下の点である。第一は、真淵の絶対万葉主義である。真淵と他の国学者が求めたのは、中国文化や中国語の

影響が日本に及ぶ以前の状態であった。そこに日本の純粋な精神が埋もれていると信じて、その証拠を平安時代以前の文書から掘り出すことを試みた。第二は、万葉集の歌の中に現れている誠(まこと)の精神の理想化であった。第三は、ますらをぶりとたおやめぶりというスタイルの区別である。真淵はこの区別を力強く、男性的な、感情を素直に、飾り気なく表す万葉集の歌と、やわらかくて、女性的な、飾りの多い古今和歌集の歌との対立として表現したわけである。これにより真淵は、それまで敬われてきた古今集とその伝授を持っている貴族の権威に疑念を呈することになった。伝授や秘伝・口伝への批判は、周知のごとく、契沖まで遡ることだが、真淵はその批判をさらに強めたといえる。

江戸では真淵の県居門の影響が強くなり、真淵歌論の批評者も何人が現れてきた。その結果として、70・80年代には真淵の周囲の歌壇には親真淵系と非真淵系しかなかったと言える。¹ 堂上と地下、二条と冷泉の伝統的な対立とはまったく関係なく、新しい歌学が成立しつつあった。万葉集が表現の究極の形として唯一のモデルに成り、誠とますらをぶりが和歌の理想になった。

真淵の門流では、宗武を初めとして、奥平まさか、牧野忠利などの大名衆も少なくなかった。その外は荒木田久老、栗田土満、本居宣長、千陰、春海と真淵の没後県居派のリーダーになった香取魚彦がいて、千陰と春海は後に江戸の門流のなかでは特別な地位を得るようになった。

¹ 鈴木淳:「和歌の革新と伝統」(岩波講座日本文学史第10巻、19世紀の文学、岩波書店1996年、48-50頁)

.上方 1750 - 1800 年

1750 年頃の京都ではまだ堂上派が勢力を強く保っていた。堂上歌壇では三つの流派が共存していた。すなわち、職仁親王とその弟子である谷川土清や特に言語学者として知られている富士谷成章の流派、武者小路実岳と弟子の澄月や伴蒿蹊の流派、そして冷泉為村と弟子の小沢蘆庵、慈延、涌蓮の流派である。後には為村と実岳が激しく競争するようになったが、弟子の澄月と蘆庵(1723 - 1801)が特に対立的であった。

蘆庵が為村の門に入ったのは 1773 年だったが、為村が 1774 年に没してから一年も経たないうちに『千首部類』という歌集を刊行した。契沖の仮名使いに拠る事によって、定家仮名使いを守っている堂上派や為村の教えからかなり離れたということを示している。また歌論書『布留の中道』(1790)では、斬新な議論を展開し、いわゆる「ただごと歌」説によって当時の歌壇や歌論に大きな刺激を与えた。蘆庵が主張したのは、歌の起原は己の情けの自然な表出にあるということであった。ただごと歌という概念を使って、古今和歌集序の六義説を批判し、歌はただの詞で表現するものだと言った。和歌は思うことを自然に述べるものだという説は古今集序まで溯るもので、蘆庵歌論だけではなく、例えば堂上派の烏丸光栄の言説にも、真淵の歌論にも現れてくるが、それを表現するために従来歌語として使われていない言葉を使うのがただごと歌の特徴と言えよう。

さて、蘆庵は宮廷にも信頼されて、京都の歌壇の頂点に立つこととなった。また本居宣長や伴蒿蹊、澄月、上田秋成などの当時の国学者、歌人とも親交があった。宣長とはいつ出会ったのか確証はない(50年代と60年代と言う

説もある)が、² 晩年にはお互いの歌を引用したり、蘆庵が宣長の歌集『玉あられ』を批判したりしたことがある。宣長は自分の和歌の短所を意識していたから、和歌の才能に恵まれた蘆庵の和歌を評価し得たのだといわれている。上田秋成が1793年に京都に引越した時から、蘆庵の世話になって一緒に和歌で遊んだりしたことは、『胆大小心録』からも明らかである。蘆庵は名を成して、名声は江戸まで及び、村田春海や加藤千陰からも高い評価を受けていた。

もう一度堂上と地下派の対立に戻ると、蘆庵及び周囲の歌人の活動が活発になるにつれて、堂上派の影響が減少した。大坂の歌壇では烏丸家や有賀長因の歌学を受け入れた加藤景範が中心的存在になり、初心者向けの歌学書を出版したり、京都の歌人である長因・蘆庵・澄月などの歌と自詠を歌集に編んだりした。先に述べた、和歌の普及に功績のあった有賀長伯と同じように、通俗歌学書によって大坂での和歌の普及に貢献した。

松阪で活動していた本居宣長は70・80年代までに国学者としても、歌学者としても地位を確立していて、神道関係や商人や武家に属する弟子が大勢出来ていた。晩年になると、国学者としての名声を博して京都の宮廷まで影響が及んだ。宣長をはじめ、蘆庵、伴蒿蹊、大坂の景範の活動によって上方では堂上派と地下派の地位が実際に逆転した。90年代頃には彼らが宮廷の歌壇の歌の会を論評したり、一つ一つの歌に評価を加えたりして、和歌に対する彼らの権威が堂上歌人によっても認められ、高く評価されるようになった。

1801年に宣長も蘆庵も没して、堂上派はまた孤立した。蘆庵には弟子が

² 清水勝:「小沢炉庵 - 親交と乖離」国文学解釈と鑑賞 67/9 (平成 14/9 月号): 75-78 頁。

大勢いても、門流としては生き続けることができなかった。宣長の門流は二つに分かれて、春庭と大平によって引き継がれ、大平は後に真淵の詩的遺産や本式な流派をめぐって江戸派の春海と大喧嘩をするところとなった。

・ 江戸 1770 - 1830 年

真淵が 1769 年に没してから県居門を継続したのは、万葉風を受け継いだ香取魚彦であった。加藤千陰と村田春海は千陰の父枝直の影響を受けて、真淵を尊重しつつも、万葉風から離れて、雅な、優雅な、寛大な独自の和歌に心を寄せていた。春海と千陰は歌集や歌学書を数多く出して、弟子も大勢いたため、その影響は広がり、没後も続いた。文化文政年代の江戸では、和歌に特別な関心のある松平定信の保護を受けて、革新的な江戸派と比較的に保守的な幕府の宗匠である北村家の間でも歌の会が行われるようになった。

そこに京都から突然香川景樹という新しい歌人の和歌が侵入した。景樹はその時 35 歳ぐらいで、まだあまり知られていなかったが、蘆庵のただごと歌の代表者として、真淵の万葉風を批判したために、千陰と春海の非難を浴びた。景樹と江戸派の間の論争は長く続かなかったが、代わりに蘆庵の弟子と江戸派の間に激しい「雅俗弁」という論争が始まった。京都で有名になった景樹が初めて江戸に出たのは 1818 年のことだったが、この時景樹は誰かに殺害されそうになった。真相は今でもわかっていないが、江戸派が関係していたのではないかと推定されている。景樹はともかくすぐに京都に帰って、江戸には二度と行かなかった。

． 京都 1800 - 1830 年

最後に京都の文化・文政年代の特徴を述べておこう。蘆庵の没後、その門流は続かなかったが、弟子であった香川景樹(1768 - 1843)が京都歌壇の頂点に立つようになった。³ 景樹の激しい真淵歌論の批評を無視した人もいたが、例えば本居大平や富士谷光荣、成合大江らは景樹と積極的に議論をたたかわせ、景樹のただごと歌と調べの説についての論争は和歌の革新に大きな刺激を与えた。

以上まとめてきたように、江戸中期の 100 年の間に歌壇活動や和歌の門流のあり方が完全に変わってきた。同時に起こった様々な歌論を比べても、差がそんなに目立たないかも知れないが、堂上派と地下派の対立から香川景樹までは、和歌の歴史の中では著しい変化が起こった。明治時代に入ると、詩歌の革新はもっと激しくなったが、それが可能になったのは江戸時代にすでに前提が出来ていたからである。その展開の背景として江戸・大坂・京都の特別な文化がどのような影響を与えたのかは、簡単には説明できないが、幾つかの点をまとめて述べてみたいと思う。

京都では堂上と地下の地位が逆転し、室町時代から伝わってきた対立が国学派(真淵、宣長、秋成)の影響によってその意味をなくした。大坂は最初から地下の影響が強く、庶民、特に商人や医師の間で行われる和歌活動が典型的であった。大坂の和歌世界は京都と密接な関係にあったが、歌学的な革新はどちらかという、京都の方から始まったと言える。一方、大坂は庶民文化・商人文化の中心として、堂上と地下派の地位の逆転に圧倒的な社会的な刺激を与えたと思われる。

³ 黒岩一郎: 千蔭・春海と景樹 国文学解釈と教材の研究、特集、第 12 巻第十号 (1967、8 月): 127-131 頁。

また江戸では最初から地下派が強く根付いていて、冷泉門流の歌人が多かったが、真淵の万葉派によって 18 世紀の 70 年代から国学派が代表的になった。傾向としては江戸も、京都の宮廷と同じように、権力をもつ將軍家の周辺では伝統を保護しようとする保守派が栄えていた。

上方と江戸の文学界を比較すると、雅と俗の対立も述べざるをえない。上方の方が雅、江戸の方が俗の象徴になっているという見方（フィクション）もよく語られている。中世まで溯る漢学や和学の伝統を持つ王城・文華の地であった京都は文人世界の中心になっていたが、文人趣味はまず上方で開花した。⁴ 文人と密着に結びつくのは雅の概念だが、それを上方文化全体に投影するのは困難ではないかと思う。18 世紀における和歌の展開を見ると、堂上と地下との対立が押しつけられた後、蘆庵が代表するただごと歌が盛んになり、蘆庵の弟子が江戸で活動している真淵派の歌人と行った「雅俗弁」の際には、俗と言われているただごと歌を勧めていた。この場合には江戸の方が雅の保護者になっていたと言える。

雅と俗の対立は伝統保守と革新のテーマにつながるが、先に述べたように、古典主義的傾向をもつ上方文化が和歌革新の源流になり得たのも興味深い。それは国学派の成立と発生とに深く関連している。18 世紀の 70 年代に確立した真淵派が主張した万葉主義は和歌の運命に大きな影響を与えた。国学派は和歌活動をその中世的な構造から解放して、和歌の革新を進めはしたが、ある意味では二条や冷泉派よりも保守的であった。和歌修辞の革新のために古今和歌集以前の時代まで溯って、反動的なイデオロギーに基づいた純粋な国語をいかそうとした。こういう万葉尊重は江戸でのみ可能であった。京都

⁴ 長島弘明：「蕪村と秋成」（岩波講座日本文学史 9・十八世紀の文学）岩波書店 1996（91 頁）；杉浦明平：「雅と俗」（文学 1968、8、Vol.36）「雅とは、古典にいわれがあり上流教養階級の手で多年用いられて洗練された風習やことばをさし、俗とは現代的であるとともに粗野な下層階級の属性なのである。」（926 頁）

の和歌世界は古今尊重を絶対化していたからである。

大坂と江戸は庶民的な文化の中心として京都にさまざまな影響を与えるに至ったが、一番重要なことは、貴族歌人と庶民歌人の階級組織が意味を失って、時には逆転するようにもなり得たということである。こういう変化を起こすのは伝統に満ちた京都ではなく、社会的に進歩的な都市ではなければならなかった。それにも拘わらず、以上述べたように、伝統と革新、雅と俗とはある地方の性質ではなく、社会構造や文化の転換にしたがって逆転するものなのである。